

生きもの異変

温暖化の足音



タイトル 生きもの異変
温暖化の足音
産経新聞「生きもの異変」取材班
(論説委員)
著者 長辻象平
(科学部・社会部記者)
中本哲也・伊藤壽一郎・田中幸美・神庭芳久・蕎麦谷里
志・小川寛太・今泉有美子・滝口亜希・黒田悠希
出版社 扶桑社
発売日 2010年12月31日
ページ数 334p

本書は、2008年1月～2009年9月までの間に計76回にわたって産経新聞紙上で連載された記事を単行本にまとめたものです。すなわち、現在進行中の気温上昇が日本列島に暮らす生物にどのような影響を及ぼしているのかを、産経新聞の科学部記者を中心とする取材班が、北海道から沖縄までの現場を訪ねて報告する内容です。

対象とした生物は、哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・昆虫・魚類などの動物から、広葉樹・針葉樹・苔類・海藻といった植物までに及んでいます。

さて、幾つかを拾い読みしてみると、

日本の平均気温は100年間に約1.1°Cの上昇ですが、海の温暖化の進行ぶりは、日本海中部では100年間に1.7°Cも水温が高くなっています。そのためか、以前は東シナ海などにいたサワラが日本海を北上、ついには2005年ごろには岩手や宮城沖でもとれるようになった。

暖流系のブリは北海道の日本海側で好漁になり、逆に冬の名物であった富山の寒ブリ漁の様子がおかしくなっている。

また、インド洋などが本来の生息域のナルトビエイが2000年ごろ瀬戸内海に進入、アサリを猛烈に食害している(第3章)。

昆虫では、蝶やセミの東進・北上が進んでいる。ナガサキアゲハは60年かけて九州から東京へと分布を広げている(第5章)。クマゼミも西日本から東日本へと広がっている(第5章)。南西諸島に多かったツマグロヒョウモンは、一気に東北地方南部まで

分布域を広げたが、これは冬に咲くパンジーの流行が関係しているようだ(第5章)。

鳥の世界では、秋に日本にやってくるマガンの越冬地の北限が、これまでの宮城県から、北海道南部に北上するという変化が起きているという(第6章)。日本アルプスのライチョウには、存続をおびやかす気温の上昇により、飛行力に乏しい彼らには、今いる山岳の頂上方向に逃げるしか道がない。哺乳類では暖冬による積雪の減少で、シカの死亡率が減り、結果としてシカやサルが高山帯にまで登り、ライチョウの餌を食い荒らしその生活を圧迫している。同じように、積雪の減少で、短足の為に豪雪を苦手としていたイノシシが富山や新潟県への進出を開始するという現象も起きている(第4章)。

屋久島の砂浜は、アカウミガメにとっては最も重要な産卵場です。ところが、ウミガメの性別は、卵が砂の中にある間の温度で決まってしまう。すなわち、ある温度以上になると雌になるため、温暖化の影響が気がかりだと述べている(第2章)。

その他、海や、山や、野や都市で、気温上上昇に伴う変化が生物界に起きている。とくに、個々の変化が相互に影響を及ぼ合うことで、生態系の異変へと増幅、伝播されていく。そのことが大きな問題だと指摘する。

私が一番驚いたのは、第5章の「深山の”吸血鬼”里山に」でした。”吸血鬼”とはヤマビル(山蛭)のことですが、泉鏡花の「高野聖」でヤマビルに襲われる若い修行僧の話が出てきますが、私も少年時代にヒルに吸い付かれびっくりした経験があります。足に吸い付いて離れない数匹のヒルをみて怖気づいたことを昨日のこのように思い出します。

登山では、登る山によってはヤマビルに襲われることもあると聞き、ヤマビルの多いといわれる鈴鹿山系の登山だけは避けていました。ところが、本書のヤマビルによる吸血被害を見ると、1980年以前の被害は「秋田」、「群馬」、「千葉」、「神奈川」の4県に限られていたのに、現在では30都府県に拡大しているといえます。何が起きているのでしょうか。

研究者がヤマビルの吸った血液をDNAで調べたところ、「秋田県」では60%がニホンカモシカで、人間はわずか3%だったそうです。「神奈川県」ではニホンジカ45%、イノシシ32%で、主な吸血源は、野生の大型哺乳類だったそうです。

シカやイノシシの分布拡大は、温暖化の影響により積雪の減少で冬に餓死する個体が減ったこと、シカやイノシシが餌を求めて里山や住宅地に出没するようになったことが主な原因のようです。

まだ、吸血被害地図には福井県は入っていませんが、福井県もシカやイノシシの個体数が増加しているところを見ると、安心してはいられない状況のようです。

例えば、シカについていえば

①「温暖化の影響で、雪が少なくなった」



②「餓死するシカの個体数が減った」



③「シカの数が増え餌不足になった」



④「シカが餌を求めて各府県に広がっていった」



⑤「それと共に、シカに運ばれたヤマビルが各府県に広がっていった」

というわけです。

自然界はシステムで構成されていますから、個々の変化が相互に影響を及ぼし合う好例です。ヤマビルが30都府県にまで広がった理由が、単純に「温暖化の所為(せい)である」と言えないのは前記①～⑤のどれか一つが欠けてもヤマビルの分布域の拡大は起こらないからです。

地球環境問題では、環境と経済の両立が強調されますが、人間と生物との共存は、さらに重要な課題です。気候変動枠組条約の下で行われたポスト京都の議論も、温暖化問題というよりも、むしろ南北問題の色彩が濃厚でした。

こういう時代にこそ、もの言わぬ生物たちの無念の声を聴きながら現状を多面的に描き出す本書のような視点に立った報告は貴重です。何が起こるか分らないのが生態系の怖さです。システムというのは、ある限界を超えると突然壊れてしまうからです。

私も、環境省のモニタリング1000に参加して、蝶の調査を続けていますが、ある種の蝶がある年は、前の年より一ケタ違う調査結果が出たりしますが、でもその理由が分かりません。分らない理由は、それがシステムだからですが、それを知るには、何年、何十年もの間、色々な人が監視し続けなければなりません。ちょっとした変化も見逃さないようにデータを集めることは、とても重要なことなのです。

生物(いきもの)は生態系のネットワーク(システム)で結ばれているため、一種への影響が複数の種へと連鎖的に拡大していき、前記のヤマビルのように思いもかけない変化を自然界にもたらします。本書は、地球温暖化の問題と生物多様性の問題を考える上で出発点となる格好の書です。各章ごとに添えられているイラストや写真も美しく、各テーマも3～4頁に上手く、短くまとめられており読みやすいお薦めの一冊です。

2011.7.16
